

小論文問題

問題 次の文章は、新しい年(2016年)を迎えた時の、新派女優水谷八重子さんのエッセイです。水谷さんは人生を巻き紙にたとえています。あなたは人生をどのように「書いて」いきたいですか。水谷さんの言葉を踏まえながら、述べて下さい。

なお、書かれた「人生」の是非を問うものではありません。

(注) 水谷八重子 大女優だった母親「水谷八重子」の芸名を継いだ。
越路吹雪オネエマ(お姉さん) 宝塚歌劇団出身 歌手

生きているわ、私。

越路吹雪オネエマの年までと、思っていたけれど、それもずーっと昔に越えてしまったのに、生きているんだわ、私。

母の年まで生きる筈なんかないって思っていたのに、その母の年も越えてしまって生きているんだわよ、私。

また、お正月が来て、新しい年になって、それでも、生きているんだわ、私。

昔はお正月が来て、全国津々浦々、男女を問わず、みな一斉に一つ年を取ってたんだっけ。それが今じゃ、それぞれのお誕生日に年を重ねる。何だか、いやだな、その年の数え方。だって、モロに肉体年齢を数えられている気がするのだから。生まれてから今年で、何十年間この手足、頭、身体を使っているんですよって、突き付けられたような気がするじゃない。

「新年明けましておめでとうございます。お互いまた一つ年を取りましたね。お互いきっと良い一年を、そしてウーンと元気でね」ってそんな風情が私は嬉しいな。

親の七光りデビューして六十一年目の今、急にこんな風に考える。人って例外なく、誰でもいつかは死んでしまうんだわって。むろん私も例外ではなく「死んでしまう」生き物なんだって、急に気が付いた馬鹿な私。

へ〜私も、みんなも、いつかは死んじゃうんだ、もう二度と会えなくなってしまうんだ。お祖母ちゃんが死んで、父が死んで、母が死んで、もうとっくに三十三回忌も終えた今頃、急に会えない人が恋しくなって、逢えないことが不思議に思える。

そこに思い至るキッカケを作ったのが、両親でもない、誰でもない猫だったからますます馬鹿な私なのだ。

誰しもたった一つだけ持っている「命」。人間だけじゃない、生まれて来た総ての生き物が持っている「命」。たった一つだけしか持っていない「命」。命ってどんなモノなんだろうかしら。

ノートみたいなものかしら？ 一人一冊限定の。

ページを一枚ずつめくって生きて行く？ ページを破いてチョコッと人生やり直す？ 何か違うような気がするな。ノートではちょっと軽すぎるような気がするなあ。

よく「一巻の終わり」って云うじゃない？ そうなのかも知れない。

そう、硬く巻いた「巻き紙」を持って生まれてくるような気がする。その巻き紙が白紙なのか、すでに神さまがお決めになったシナリオが書かれた巻き物なのか解ろう訳もないけれど。

すべて同じ太さの巻き紙に見えても、途中でプツンと切れるのもあるのだろうし、ほどこいてもほどこいても何処までも続く巻き紙かも知れないし。でもそこに、すでにシナリオが書かれているとは思いたくはないな。シナリオに身をゆだねて、泣いたり笑ったり、生きて行く？

役者の家に生まれて、乳母日傘（おんばひがさ）で育てられ、悲惨な戦争も田舎でノンビリ知らずに育つ。と、此処までは神さまが両親に命じてかどうか、私の巻き紙に書かれていたような気がする。

成人式ってのからは「自分でお書き！」になるんじゃないのかしら。まずは憧れの人を、パステル調で描き、現実にあふれて、毒々しい油絵になって、必死に次の白い紙に辿り着く。

いろいろな絵を、文字を書き刻みながら生きて行くのかも知れないなって私は思う。

私、随分、巻き紙、使って来ちゃってるんだわよもうすでに。有効なことなんて何にも書いてないじゃない、私のこの巻き紙。

後、どのくらい残っているのかしら？ どの位使えるのかしら？ 私の巻き紙。

何か書かなくちゃね、せつかく生きてるんだから。何かを書き残さなくちゃ、せつかく生かされているんだもの。

そうよ。百二十八年続いた「新派」を書き残さないで、私の巻き紙、終わる訳にいかないじゃないの。「八重子」と母の名を名乗って二十一年、しっかり生きて行かなくっちゃねッ！ 私。

（水谷八重子著「私の巻き紙」より）